

# 創立50周年記念誌

「小川町三丁目西町会」は  
経済白書に「もはや戦後ではない」  
と謳われた昭和31年に誕生し、  
平成18年、創立50周年を迎えました。

町会設立のおよそ50年前に日露戦争、  
その50年前にはペリー黒船来航。  
50年の歴史の重みを強く感じます。  
ここに町会の歩みを振り返るとともに  
次の世代への第一歩を記したいと思います。



駿河台下交差点（平成18年）



靖国通り「マカラズヤ」側より 富士見坂を望む（昭和24年頃）

# 目 次

町会創立 50 周年に寄せて	小川町三丁目西町会会長 岩崎 與 士	1
町会年譜／年間事業		2
歴代町会長		4
コラム①町名の由来		5
洋服店今昔	副会長 斎藤 鉄太郎	6
わが町のこと	副会長 松島 健	7
大学紛争と町会	顧問 神戸 祐三	8
<b>町会行事</b>		11
・ 新年交歓会／町会海水浴		13
・ 卒業祝い／入学祝い		14
・ 成人式		15
・ 校外補導部／子供会		16
・ 婦人部新年会／文化部夏のバスハイク／もちつき大会		17
・ 町会旅行会 その 1		18
・ 町会旅行会 その 2		19
・ 婦人部旅行会／簡易保険団旅行会		20
・ あれこれ		21
・ 民謡同好会		22
コラム②幸徳稻荷神社		22
<b>思い出のアルバム</b>		23
・ 終戦直後／小川町公園のこと		25
・ 進駐軍／昭和 30 年代の子供の遊び		26
・ マーケット／路地		27
・ 野球チーム／町にテレビジョンが来た		28
・ 明治大学旧校舎		29
・ 明大優勝パレード／火の見やぐら		30
・ 都電の思い出／丸の内線開通		31
・ 洋服屋さん／忍塾		32
コラム③永井龍男について		33
<b>お祭り今昔</b>		35
<b>これからの町会</b>		47
編集後記		48
【資料】		
・ 町会員名一覧		49
・ 町会役員名簿		50
・ 小川町三丁目西町会会則		51
・ 小川町三丁目西町会防災団名簿／規約		53

# 町会創立50周年に寄せて

小川町三丁目西町会 会長 岩崎 與 士

寄り添って 神田の町に 五十年

絆 結びて 喜び深く



小川町三丁目西町会創立 50 周年、誠におめでとうございます。  
昭和 31 年 9 月、日比二一氏を初代会長に発足してから、二代目  
澤田末吉氏、三代目戸田武雄氏、四代目小関啓一氏、五代目神戸  
祐三氏、そして私と続いてまいりました。

会長が替わっても変わらないのが町内の「人の和」です。当町会は町の規模、所帯数こそ大きく  
はありませんが、一番誇れるのは町会の「和」だと思います。

近年、私の小学校の同期の友人が町会に移ってこられました。日頃の付き合いの中でふと「こ  
の町会に移って良かった」ともらされた事が有りました。それを横で耳にしたとき気持ちがホッと  
し、後に胸が熱くなりました。この時、その友人にこの町会の「人の和」が伝わったと感じました。

常時の町会の運営は、総務・会計をはじめ各部がその役割分担を的確に行い、各事業を計画通り  
に遂行しておりますので誠に喜ばしいことです。

昨今心配事と言えば、町会の店舗の出入りの多さとその早さです。開店したかと思うと数ヶ月で  
閉店したりと本当に慌ただしい限りです。こんな落ち着きのない世相では「人の和」もなかなか結  
べません。縁有ってこの地で生計を立てていかなければならない私達町会の住民は、この町が明る  
く清潔で安心して生活できる場にして行く事が肝心です。その為に必要なのは「人の和」です。こ  
の町に住む人、働く人が一緒に力を合わせてわが町を築いて行こうではありませんか。

50 周年に当たり、町会員皆様の日頃のご協力を感謝しますと共に、次代へと続く新たな第一歩  
を踏み出したいと思います。

# 町会年譜

昭和31年 9月 町会設立

初代町会長に日比二一氏就任

戦前、小川町全地域は一つの町会で、当町会は「七の部」と称されていましたが、靖国通りを境に北部と南部の二つの町会に分離され、「四・五・六・七の部」（現在の小川町北部一丁目・北部二丁目・北三・三丁目西町会）が合併して小川町北部町会となりました。

しかしながら昭和22年「マッカーサー指令15号」により解散させられ、当町会は「小川町北部第四班」として自主的に活動し地域の親睦に努めていたところ、町会設立が認可され昭和31年9月「小川町三丁目西町会」が誕生しました。



## 町会設立当時の役員

町会長	日比二一	総務部長	戸田武雄	青少年副部長	須藤昌男
顧問	浜田次郎	副部長	岩崎虎雄	厚生部長	中山昌一
相談役	秋草愛一	文化部長	富岡實	副部長	木邑達司
副会長	澤田末吉	副部長	近藤重輝	同	増渕一雄
同	中根源吉	保安部長	田近栄一	納税貯蓄部長	斎藤主司
会計	平井清	副部長	小関啓一	副部長	金岡梅雄
同	斎藤治男	同	神戸祐三	婦人部長	沢田テル
監査	勝呂泰尚	青少年部長	藤枝幾二郎	副部長	松島婦
同	平田松蔵	副部長	日比博		

- 昭和32年 新年交歓会、成田山初詣を行う
- 35年 小川町公園閉園
- 38年 納税貯蓄組合を結成
- 39年 新年の門松簡素化により謹賀新年のポスターを町会より全戸に配布
- 41年4月 澤田末吉氏第二代町会長に就任
- 町会創立10周年を祝う
- 同年11月 予て住居表示審議会に陳情していた「神田小川町」の名称を現状維持で確定する
- 43年10月 簡易保険団を結成
- 44年1月 大学紛争の余波に備え自警団組織を結成



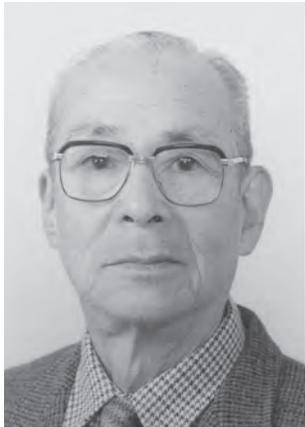
# 歴代町会長



初代 日比二一  
(昭和31年9月～40年12月)



第二代 澤田末吉  
(昭和41年4月～51年9月)



第三代 戸田武雄  
(昭和51年9月～平成2年3月)



第四代 小関啓一  
(平成2年4月～8年3月)



第五代 神戸祐三  
(平成8年4月～15年3月)



第六代 岩崎與士  
(平成15年4月～現在)

# 町名の由来

駿河台下は本郷台地が南に突き出した舌状の大地のはずれにあり、8,000年頃前の海進期には、目の前がすぐ波打ち際でした。これは明治大学の西側に貝塚があった事でも分かります。

江戸時代、小川町は神田の西半分を占める広大な地域をさす俗称でした。古くは、鷹狩に使う鷹の飼育を行う鷹匠が住んでいたことから、元鷹匠町と呼ばれていましたが、元禄6年（1693）に小川町と改称されました。五代将軍綱吉が「生類憐みの令」を施行、鷹狩を禁止したため改称されたという話も伝わっています。

小川町の名前の由来は、このあたりに清らかな小川が流れていたからとも、「小川の清水」と呼ばれる池があったからともいわれています。江戸城を築いた室町時代の武将太田道灌はその風景を「むさし野の小川の清水たえずして岸の根芹をあらひこそすれ」と詠んでいます。江戸城の高台から見下ろすと、こんな景色に見えるほどの湿地でした。小石川や平川の流れのほかに、本郷台地のはけ水もふんだんに湧いて流れ込んでいたのでしょうか。この歌から、一帯は小川町低地と呼ばれていたようです。この頃、海は日比谷の辺りまで退き、水道橋から大手町にかけては川の流路も定まらない湿地帯でした。

徳川家康が1590年に関東に移封され江戸に入ってから、駿河より連れてきた家臣団を住ませたのが駿河台の始まりです。はじめは湯島方面へも陸続きで行き来できたのですが、二代秀忠の頃に神田川の開墾が始まって、それ以来、明治24年10月にお茶の水橋ができるまで280年もの間、陸の孤島のようなところでした。江戸城への往来には駿河台下の小川口（富士見坂）を通るのが習慣でした。安政3年（1856）の絵図では、この界限に寄合医師和田春孝、常陸土浦藩 土屋家の上屋敷などが見られます。

明治5年（1872）、周辺の武家地を整理し、富士見坂を境に北側は猿楽町一丁目、南側は小川町となり、明治11年（1878）神田区に所属します。ちなみに富士見坂の名は、坂の上から富士山が見えたことに由来します。

明治時代の猿楽町一丁目には、英語、漢学、数学などを教える研精義塾、裁縫を教える裁縫正鶴女学校や婚姻媒介所などがありました。小川町には、西洋料理店やビリヤード場、小川町警察署などがあり、学生たちで賑わう街でした。

また町内で生まれ、過ごした昭和期の小説家永井達男は、文藝春秋社で雑誌編集長を務めたのち、後年には文化勲章を受章しています。

昭和8年（1933）の区画整理により、旧小川町と旧猿楽町の一部が統合され、ここは小川町三丁目（西）となります。昭和22年（1947）に神田区と麴町区が合併して千代田区が成立すると、町名も神田小川町三丁目となりました。



# 洋服店今昔

小川町三丁目西町会 副会長 齋藤鉄太郎

昭和の時代、町内のテーラーは学生服とのつながりが強く、日頃学生さん達と親しいお付き合いをしていて、何かと相談に乗っていたりしていました。家族的なお付き合いまでしていた人も多く、その父兄とも知り合いになり、お客様になって頂いた事も多くありました。

大学の入学式や卒業式には、店の前で大学の校歌をレコードで流し、雰囲気盛り上げたものです。卒業の年には背広を新調して社会に巣立っていきました。

店主の方々は殆どが創業者で、それぞれ「一針月歩」の気持ちを入れて技術研究に励み、各店の個性が十店十色でオリジナルスタイルを持っていたので、洋服を見て「これは〇〇洋服店が作ったものだ」と直ぐに分かりました。

当時、機動力は自転車、スクーター、オートバイで、それらに乗って東京中を颯爽と走って仕事に精進しました。

商いが年々増して、洋服業の良い時代だったのも、昭和の経済成長と洋服の売上は大いにつながりがあった事が原因で、デパート等の売上のバロメーターは紳士服の増減がその基準になっていました。

ファッションの流行は、アメリカンスタイルからフランス・イタリー・イングリッシュスタイルへと移り変わり、その都度、新しい技術・ラインを勉強したものでした。音楽の流れがプレスリーからビートルズへと移って行った事とファッションが何か相通じるものがありました。

昭和39年に東京オリンピックが開催されることになり、力と団結と夢をもって高速道路や新幹線の開通等と、日本は素晴らしいスピードで開発が進みました。

我が洋服業界も、選手団の赤いブレザーと白いスラックスの、日の丸カラーのユニフォームを製作するにあたり、ジャパンスポーツウェアクラブを結成し400名以上の大団体のブレザーを手縫いで縫製し、開会式に間に合わせ、期待と希望に応えました。

10月10日の開会式に整然と行進した選手団を競技場の観覧席で目の当たりにした時、世界に対し服装・技術・ファッションも負けていないと思い、興奮と感動を覚えたものです。

洋服屋の商いは「お客様がいかに偉い人でも仮縫いの時には下着姿になり鏡の前では『気をつけ』の不動の姿勢をとってもらおう」と、ある先輩が言っていた事を思い出しました。

いづれにしても、時代の流れで洋服店も減少しましたが、商いは楽しく続けてやってくるのが使命だと考えております。



日本選手団入場

# わが町のこと

小川町三丁目西町会 副会長 松島 健

昭和30年代……三種の神器は白黒テレビ、電気洗濯機、電気冷蔵庫。日本が急激に豊かになって行った時代、それは各家庭に「モノ」が行き渡っていった時代であり、明るい電灯が灯された居間で家族が揃ってテレビを見る、新築の団地に入居する、マイカーを手に入れる、そういう物質的な充足が目標となり、その充足が幸福感を満たす、ある意味では幸せな時代でありました。

34年に皇太子ご成婚、39年に東京オリンピック開催。日本の成長も華々しく神武景気、岩戸景気を中心に目覚しく発展を遂げ、フラフープにダッコちゃん。人気番組は「夢で会いましょう」や「シャボン玉ホリディ」。太陽族に慎太郎刈りが流行、そしてロカビリーが大流行。カミナリ族、六本木族、みゆき族と若者文化を「族」文化として捉えだした時代。30年代前半はプロレスの力道山が活躍し、街頭テレビに人々が群がり、30年代後半はプロ野球では長嶋が、大相撲では大鵬が活躍した時代でもありました。

町会は全員家族のような時代でした。町会長は日比二一さん。当時はどこにもありましたが、ボクの町にも無尽（むじん）【会員が会費を納め、札を回して今日一番の当たり籤を引いた人が当日の会費を全部頂いていける庶民金融の一つ】があり、町会長のお宅で月に一度行われていました。日比会長は当たりを祈願してか「ひろみィ！」（現在の日比廣美さん）と大きな声でお孫さんの名前を叫びながら札を引き、みんなを笑わせました。

ボクたちにとって青春が新鮮だった当時は車の交通量もあまり多くなく、夜ともなるとさらに少なくなり、地域での遊びには車道でのかくれんぼ等が出来たほどでした。少し町から離れたお話をさせていただきますと、仕事も終わり夜ともなると出掛けた遊び場は、六本木では今では珍しくもありませんが早朝までやっていた「ハンバーガーイン」や火事で消失してしまいましたがロシヤ料理の「ボルガ」、小さくて雰囲気の良いナイトクラブ「チャコ」。赤坂には「ミカド」「コパカバーナ」「銀馬車」など、横浜まで飛ばせば「ナイト&ディ」「クリフサイド」、バンドホテルの「シェルルーム」等々、プロの女性たちがとてもとても美しく輝いており、毎日新鮮な出来事があり、ドキドキしながら夢中で遊んでおりました。

ボクの店は靖国通りの三省堂書店の向かいにあり、店の包装紙や納品袋には駿河台下電停前と印刷されていました。電停とは都電の停留所の意味で店の前をチンチン電車がトコトコとゆっくり走っていました。

六大学野球での明治大学の優勝祝賀の提灯行列では学生さんが酒をたらふく飲み、肩を組み、興奮しながら校歌を大声で歌いながら歩いていたのは、自分の所属の場（学校）に誇りを持っていた時代だからであったのでしょうか。ひととき大学も郊外に移って学生さんが少なくなった時もありましたが、青春が新鮮な文化を求めることは当然の成り行き、学校の方針も都市型が主流ともなり、明治大学も新時代の到来を告げるが如くに近代建築に改築されました。近々には日本大学も明治の向かいに装いを競う新校舎を計画中と聞いております。

わが町は周囲に本屋さん、スポーツ店、楽器店の専門職種に囲まれている、そして学生と若い人たちが集まる、いわば文化の発信地です。これらの特色を大いに活かし、これからも町の方々と仲良くさせていただきながら過ごしていきたいと思っております。



# 大学紛争と町会

小川町三丁目西町会 顧問 神戸祐三

昭和43年から44年にかけての116大学での紛争の原因やその過程は、既に多くの記録が残って居るので、今は小川町に住む住民の立場で、思い出を記しておきたいと考え、筆を執ることにしました。

当時近くに中央大学・明治大学・日本大学・電機大学・共立女子大学・専修大学等のキャンパスがあり、幾つかのキャンパスで内ゲバが始まっていて、靖国通りを小さな集団がデモをしている姿があった。

また、町内の通りでも特異な姿で小規模な集団のデモが通過し始めていた。当時、家の前のたばこ屋さんのおばあさんは70歳を超えていたが、今日の連中は赤ヘルだから気をつけなければとか、青ヘルだから大丈夫とか話す程度に見慣れて来ていた。

それらの集団が、社会学部の根拠地の中大学生会館（現トヨタ寮）を、明大中心の社青同の集団が竹槍と火炎瓶で激しい襲撃をするようになって、警視庁機動隊が頻りに町に出動するようになった。昨日は5機隊、今日は3機隊と各隊の顔をこわばらせた機動隊員や、それらを取り巻く多くの私服警官が、雨のような投石をジュラルミンの楯で防ぎながら、各隊特色のある規制や制圧をするようになり、私の店では窓と入口のガラス部分をベニア板で覆い、投石の被害を防ぐようになった。社員達は素早く実行出来るように板をかける鉤鉋を取り付けたり、工夫を凝らしたりしていた。道灌道周辺は連日戦場のようだった。



機動隊が放水と共に催涙ガスをしきりに発砲するようになって、屋内まで催涙ガスの煙が立ちこめるようになった。我が家ではマルチーズの子犬と数匹の文鳥を飼っていたが、苦しがるので隔離せねばならない日が連日のように続いた。機動隊との闘いで怪我をした学生が、無理に屋内に逃げ込んできて、対応に苦しむことも再三だった。

街の歩道の敷石等は全て掘り返され、砕かれて投石に利用された。その後に商店会等で特に舗装した所以外は、現在もアスファルト舗装になっている。

地元の8町会は既に神田警察の後援で、当町会の沢田会長を代表とする「8町会連合」を組織して対応し、自警団を結成したが、簡単には運ばなかった。例えば「本日どの集団が何時頃から当町内でデモをするについて規制をする」という警察からの連絡があっても、どの程度情報を伝達したらよいか、判断に迷うことも出てきた。町会長の中でも時に学生に極めて同情的な発言をする人もあって、一律には纏まらず対応が難しくなっていた。

特筆すべき、時として隣の家にも行けない「カルチェラタン」騒ぎは、昭和44年1月19日の、学生たちに占拠されていた東大安田講堂の封鎖解除の実力行使に伴って、周辺地域で始まった。本郷一帯まで続く、バリケードで囲われた完全な不法地帯が形成された。当町内でも明大通りのサイトテラーさんと明大小川町校舎の間と、22番地と26番地のミズノさんの間の道路が、お茶の水を背にして、完全にバリケードで封鎖され、道の端をやっと1人が通れるだけになり、全共闘側の学生が24時間警備し、時折ストームのようにデモをして、交通は遮断され、異常事態だった。見物人も集まって来たが、そこへ屋台を引いて食べ物を売りに来る者、学生に差し入れに来る者までが現れて、治安は全く守られず、法治国家の態は無くなった。町内でも富士見通りは通行できたが明大前は横切れず、気分的に安全には程遠かった。

沢田会長からは繰り返し電話で情報が伝達され御指示を頂いたが、沢山の野次馬で誰が味方か、そうでない者かが判らず、町を自由に動ける状況ではなく、住民に被害が出ないように気をつけるのが精一杯だった。

2日程過ぎて、機動隊の凄まじい制圧が始まった。それは以外にあっけない顛末で情けない姿だった。バリケードは崩され、大きな網に包囲され、まさに一網打尽にされて捕まった男女学生達は、大和魂で死にももの狂いの戦争を体験した私達男女にとってみれば、情けない闘いだった。しかし東大の安田講堂の攻防は、TV中継され凄まじかった。

一方、神保町と我が町会との靖国通りでは、東側から後ろ手に縛られた素足の捕虜の学生を、投石からの楯にした機動隊が、投石で瓦礫の道となった通りを進む姿がTVで中継され、新聞でも「松島清光堂」「割烹ちよだ」「住友銀行神田支店」の写真が全国に流れた。

そしてこの東大安田講堂の鎮圧からも、明治大学が学生に占拠されるなど、全共闘による大学占拠はますます全国に拡がり、地域の住民達に大きな被害を与え、9月には婦人部有志が、NTV青島ワイドショーの学生達との闘論対談会に出席し、熱気溢れる憤懣を披露した。これらの紛争は生活にも大きな影響を与え、冬まで続いた。



やがて神田警察署は中心で活躍した町会長と数人の人達に感謝状を贈り、8町会連合は沢山の課題を残して解散した。この「8町会連合」については大学との関係や、関係者の生活上の問題もあって、殆ど記録を残していないと聞いている。

# 町 会 行 事

町会行事は新年交歓会から始まります。そして成人式、新年会、婦人部新年会、卒業・入学祝い、旅行会、区の運動会参加、クリスマス子供会、歳末夜警、餅つき大会と続きます。

また昭和 30 年代の中頃までは児童数も多く、錦華小学校の PTA 活動の一環として校外補導部があり、夏休みのピクニック・工場見学・博物館見学など町会と一体になって活動しました。

町会発足当時、新年交歓会には正装した大人、“よそいき”を着た子供達が 100 名前後、小川町公園に集まりました。夏のバスハイクではバス 2 台で海水浴に行きました。旅行も当初は何故か背広・ネクタイが当たり前です。餅つき大会は町内総出の暮れの恒例行事で、つきたてのお餅の美味しさは忘れられません。

こんな思い出の写真が沢山集まりましたのでご覧ください。

## ◇新年交歓会 《信じられないほどの出席数》

毎年1月1日に、町会員の年の初めの顔合わせとして新年交歓会が行われていました。当初は小川町公園で、後にそこが閉園となると14番地と20番地の間の道路を歩行者専用道路にして行いました。町会長の挨拶に続いて今年一年が明るい年でありますようにと日本酒（子供はサイダー）で乾杯した後、しばらく歓談し元日の午前中のひと時を楽しく過ごしました。それぞれの家庭でお正月の朝のお祝いのお屠蘇をいただいた後なので、中には赤い顔をした大人もいて、子供達に冷やかされていました。



写真でも分かるように小川町公園の頃の新年交歓会は、こんなにも町会員がいたのかと思うくらいに驚きます。その後、在住者が減少したり旅行等でお正月は不在の家庭も多くなったため、残念ながら新年交歓会は中止となってしまいました。



## ◇町会海水浴 《バス2台でも乗り切れないくらい》

昭和31年

上記の新年交歓会と同様、子供たちも町会行事に当時はこんなにも大勢の人が参加しました。



昭和45年

## ◇卒業祝い／入学祝い《本人以上に親が感激》

かつて当町会に子供達が大勢いたころ、小学校を卒業する児童と入学する児童に対して町会でお祝いをしました。町会長宅で、ささやかではありましたが、お菓子とサイダーやコーラでその卒業と入学を祝い、記念品を贈呈しました。



昭和43年



昭和44年

## 成人式 《この時の新成人、今ではおじいちゃん・おばあちゃん》

成人を迎えた方にも入学・卒業祝いと同様に町会でお祝いをしていました。町会長宅で（後に町内の飲食店を借りて）二十歳になった事を祝して乾杯し、記念品を贈り、新成人の輝かしい将来を祈念しました。現在では該当する成人が年々減少したため、記念品のみ贈呈しています。



昭和42年



昭和43年



昭和44年

## ◇校外補導部《上級生は下級生の面倒を》

錦華小学校（現、お茶の水小学校）のPTA活動の一部門に校外補導部がありました。放課後や日曜・祭日などに町会の方がボランティアで子供達と一緒に公園や公道の清掃をしたり、博物館へ見学に行ったり、夏休みなどにはピクニックに連れて行ってもらったりしました。



昭和34年

## ◇子供会《指折り数えて待ちました》

校外補導部が発展的解消した後、町会が中心になって、町内の子供たち（小学生以下）を対象に子供会を催していました。12月には駿河台ホテルをお借りしてクリスマス会を行い、その時にやるゲームや遊びに当時の青少年部長さんは毎年頭を痛めていました。



昭和50年

## ◇婦人部新年会 《当時からグルメの会》



昭和35年



昭和40年

## ◇文化部 夏のバスハイク 《申込受付と同時にすぐ満員》



昭和43年

## ◇もちつき大会 《毎年の恒例行事》



昭和60年



昭和48年

## ◇町会旅行会 その1 《今年で57回目》

当町会の旅行会は昭和25年に、町会員の親睦を目的にして始まり、以降、毎年欠かす事無く今年まで57年間！も続いています。記録を調べてみると初期の頃は2泊もしていました。当時の、所謂『良き時代』を彷彿とさせます。

毎回順番で幹事を持ち回り、その方たちを中心に場所その他を選定しています。回を重ねるにつれて日本の有名な観光地は殆ど訪れ、後には韓国・台湾まで行きました。最近ではまた原点に戻り、近場でも未だ行ってない所をゆっくりと見学して回り、美味しい料理を味わう事を主眼としています。当初は婦人も参加していましたが、その後「婦人部旅行会」を独立させました。

<p><b>【昭和25年～】</b></p> <p>第1回 山梨富士五湖 第2回 草津四万温泉 第3回 東山温泉 那須温泉 第4回 熱川温泉 第5回 松島湾巡り 鳴子温泉 第6回 伊香保温泉 水上温泉 第7回 伊豆半島巡り 第8回 志賀・渋温泉 浅間温泉 第9回 身延山 湯ヶ原温泉 第10回 天竜峡 諏訪温泉 第11回 塩原温泉 川治温泉 第12回 日本平館山寺 第13回 天城山 伊豆稲取温泉 第14回 伊勢湾・鳥羽</p>	<p>第15回 房総白浜温泉 第16回 草津温泉 第17回 南紀白浜温泉 高野山 第18回 高山下呂温泉 第19回 蔵王温泉 立石寺・天童 第20回 北陸山中温泉 第21回 十和田湖 浅虫温泉 第22回 養老の滝 湯の山温泉 第23回 倉敷琴平巡り 第24回 天の橋立 城の崎温泉 第25回 東山温泉 裏磐梯山 第26回 伊良湖 三谷温泉 第27回 京都寺院 六甲山巡り 第28回 彦根琵琶湖 雄琴温泉</p>	<p>第29回 金華山 中尊寺平泉 第30回 黒四ダム 宇奈月温泉 第31回 山陽萩・福岡 第32回 能登半島 九十九湾 第33回 龍泉洞 浄土ヶ浜 第34回 佐渡ヶ島 第35回 南紀勝浦白浜 第36回 小岩井農場 花巻温泉 第37回 松山道後温泉 第38回 伊良湖岬 三谷温泉 第39回 洞爺湖温泉 札幌市内見物</p> <p><b>【平成元年～】</b></p> <p>第40回 山寺・最上川 温海温泉</p>	<p>第41回 倉敷花の万博 瀬戸大橋 第42回 男鹿半島角館 田沢湖 第43回 韓国ソウル市 第44回 台湾・台北市 グルメツアー 第45回 北陸山中温泉 第46回 九州日田温泉 第47回 沖縄 第48回 上高地 帝国ホテル 第49回 四国四万十川 第50回 飛騨高山 第51回 寸又峡 第52回 鬼怒川・日光 第53回 九州・湯布院 第54回 伊豆修善寺 第55回 草津白根方面 第56回 山形天童温泉</p> <p><b>【平成18年】</b></p> <p>第57回 蓼科高原方面</p>
--	---	---	--



記念すべき第1回目の旅行 昭和25年 富士五湖周遊

## ◇町会旅行会 その2 《韓国・台湾にも行きました》



初期の頃は全員がスーツ姿で旅行に行きました。  
昭和30年 伊香保・水上温泉



昭和42年 日本ライン下り



昭和45年 十和田湖



昭和48年 天の橋立



昭和52年 彦根城



平成8年 沖縄・守礼門

◇婦人部旅行会 《婦人部ならではの場所と行程》



昭和41年 熱海



昭和42年 平安神宮



昭和46年 湯の山温泉



昭和55年 高崎・観音山



平成6年 奥日光

◇簡易保険団旅行会 《楽しかった思い出を残して解散しました》



昭和52年 小田急・花鳥山脈



昭和54年 千葉フラワー園

## ◇あれこれ 《結構スポーツが盛んでした》



### 皇居周回千代田区駅伝大会 当町会出場メンバー

1周目をトップで第二走者にたすきを渡し、助っ人で呼んだ明大バスケット部の現役部員（左端）に期待したものの残念ながら最終的には入賞できず。 昭和31年



### 青少年部 夏のキャンプ（箱根園）

生まれて初めての水上スキー 昭和32年



### 敬老のお祝い

昭和43年

左から 増測ミツさん(71歳)、  
守屋さん(75歳)、大須賀ナカさん(87歳)  
後列の岩崎さん、澤田さんはお世話役



### 体育大会 神田公園地区優勝祝賀会

昭和43年

現在では午前中の綱引きが『やっと』



### 錦華小学校・幼稚園運動会 昭和31年

明大と錦華小学校の旧校舎(講堂)が見える。

## ◇民謡同好会《継続は力なり 平成 19 年 2 月で満 30 歳の誕生日を迎えます》

民謡同好会は昭和 52 年 2 月に町内の希望者、戸田武雄・富岡實・日比博・加藤久人・村上悦造・増渕一雄・増渕利夫・澤山行雄・横山文雄・岩崎興士・田近恭一（敬称略）の 11 名で、日比さんの二階をお借りして民謡若房会師範・横川栄先生のご指導で始まりました。

毎週火曜日午後 7 時から 9 時までの 2 時間、お茶の水小学校の会議室を借りて稽古をしています（文化部事業）。

忘れもしません、第 1 曲目は『ソーラン節』でした。普通は低音から出るのに高音から出る「ヤーレン」が印象的でした。それから 29 年、教えて頂いた曲数も 110 曲を超えました。発足以来なんとなく出欠を記録してきましたが、それがいつの間にか大切な宝物になってきました。

会員も物故者になられた方があって大分入れ替わりましたが、現会員は富岡・岩崎・田近・加藤・沢田・斎藤（高）・新井・大井（1 丁目）の 8 名で横川先生の指導宜しきを得て練習に励んでいます。年に一度の親睦旅行も恒例になり、新たな楽しみになっています。

興味の有る方は是非見学にいらしてください。お待ちしております。



## 幸徳稲荷神社

小川町北部一帯が氏子となる幸徳稲荷神社は、江戸時代に山城の国（現、京都府）淀の城主（伏見区・淀町十万二千石）稲葉丹後之守（三代将軍家光の乳母春日局の後裔）の江戸小川町中屋敷内に祀られてあったもので、当時は鍛冶屋稲荷と称して代々五穀豊穡・武運長久を祈願した由緒ある社として伝えられております。

明治維新後はこの地に商家町民が移り住み、町の名も小川町一番地となり、町内の守護神として伏見稲荷より霊を勧進して近隣氏子有志によって新しく社殿を建立し、毎年 5 月 14 日・15 日の両日、修祓式を行い神楽を奏し祭典を施行してきました。



終戦まで私たちの町会は小川町北部町会第四班と称していました。その名前は今でも当町会のお祭りの山車の太鼓に墨痕鮮やかに書かれています。昭和 22 年、小川町北部町会が GHQ の指令により解散して現在の四つの町会に分離する時、古老総代は神社の廃絶を危惧し幸徳稲荷神社奉信会を結成して（氏子 500 世帯）町会相互の連絡親睦と一層の崇敬を深めつつ、戦後の町の復興再建に、あるいは四町会発足の基となって私たちを勇気づけ励ましていただき今日に至っております。



思

い

出

の

ア

ル

バ

ム

簡単に50年と言っても『半世紀』と聞くと、その長さや重みがひしひしと体を感じられます。町会員の皆様の中でもこの間の楽しかった思い出、嬉しかった思い出、いま思い出してもほろ苦い思い出など沢山あったと思います。

今回、町会創立50周年記念誌を発行するにあたり、多くの皆さんから思い出の文章を寄せていただきました。厳密に50年にとらわれず、個人個人の記憶の中で一番印象に残っている事柄が数多く集まりました。

戦後の焼け野原が残る町の中でも子供たちはそれぞれの遊び、楽しみを見つけ、元気にたくましく育って参りました。そして思い出の沢山つまった明治大学は、私たちにとって山や川に変わる故郷のランドマークにもなっています。交通手段と言うと殆どが省線と都電に頼っていた時代、赤い車両の地下鉄丸の内線が開通した時は、新しい時代の始まりとさえ感じました。

こんな町会の“昔”にタイムスリップしてください。

## ◇終戦直後《こんな時代もありました》

昭和20年代の初め頃、私たちの町は未だ戦争の傷跡が癒えず、殆どが焼け野原のままか、急造のバラック小屋がやっと建てられたような状態でした。戦争中、疎開していた人たちが段々と戻って来るようになり、大人の方々はその日の生活と町の復興に毎日汗水垂らして働いていました。子供たちもその手伝いをしながら合間をみては空き地で鬼ごっこをしたりキャッチボールに興じたりしていました。着る物も満足に無くて履物が草履でも、その表情はとても明るく、毎日を逞しく過ごしていました。



昭和22年

## ◇小川町公園のこと《焼け野原に皆んなで作った三西町立公園》

現在20番地の第二龍名館ビルのある所は、戦後焼け野原でした。当時、公立の公園は未だ整備されてなく、子供たちの安全な遊び場所がありませんでした。

そこで当時の町会の役員の方たちが、龍名館の浜田次郎さんに交渉して、暫くの間お借りする事ができるようになりました。ただし空き地は罹災後荒れ放題のため、大人も子供も動員してその整地にあたりました。後は専門の業者に依頼し、境界の柵や遊具類を設置しました。開園式の日には、浜田さんを始め町会役員・学校の校外補導の担当の先生の列席の下、厳かにその式典が行われました。浜田さんのお孫さんによる滑り台の初すべりなども行われたのを記憶しています。

遊具としては滑り台の他に、大小のブランコ・砂場がある程度のものでしたが、子供たちには最高のプレゼントだったように思います。砂場には藤棚が拵えてあり、5月には見事な藤の花が垂れ下がっている様は本当に印象的でした。

公園内では一箇所だけ整地出来ない場所がありました。防空壕の跡地と、その周辺だけ低地となっていた為です。そこには当然、安全のために柵で囲ってあったのですが、探検心の強い特に男の子たちは柵を乗り越えて遊んだものです。防空壕は竪穴式で、その中に2B弾を打ち込んだりしました。

小学生も、特に上級生は遊具では遊ばず、当然のように野球が始まります。公園の南側をホームベースとして明治大学側を外野にしたのですが、公園の柵の外側は道路でそこにボールを打ち込んだらアウト、それを飛び越して大学の敷地まで届けばホームランという変則ルールも作りました。



昭和28年

公園の正面入り口（明治大学通り）にはアーチ看板が作られ、サザエさんの漫画と『小川町立児童遊園地』という文字がありました。

## ◇進駐軍《アイムソーリー》



現在の『戦後の記録』などの本を読むと【駐留軍】と記載されていますが、当時は誰もが「進駐軍」と呼んでいました。子供心にも「シンチューゲン」という音の響きが不思議な雰囲気を醸し出していたのを憶えています。神田の町もあちこちの建物・施設などが進駐軍に接収され、軍服を着たGI（ジーアイ）がジープを乗り回し、軍用トラックも町会近辺を走り回っていました。

錦華公園と山の上ホテルも進駐軍に接収され、主婦の友社は婦人将校の宿舎でした。錦華坂でキャッチボールをしていると、時々ボールが今の錦華公園にあった進駐軍の駐車場の敷地内に入ってしまい（「アイムソーリー」と言いながら）有刺鉄線の間からボールを取ってもらった事などもありました。

いつの時代でも子供たちはよく遊び、10番地の路地（守屋さんの所）でチャンバラごっこ等をよくやりました。嵐勘の鞍馬天狗の映画が掛かると大勢で見に行きました。

錦華坂ではリング箱に車を付け転がして遊びました。雪が積もれば竹（正月に家々の入り口の両脇に飾った物の残り）でスキーを作り滑って楽しみました。

富士見坂を靖国通りから上って直ぐ右手に、昭和22年頃からトンカツ屋・甘味屋・パチンコ屋・自転車屋（貸し自転車）・中華屋・雀荘・レストラン等を順々に営業する店があり、その隣の近藤さんは外食券食堂でした。町内には卓球場、碁会所等もありました。

昭和41年頃は町内に雀荘が10軒ありましたが、今では2軒だけです。



昭和25年頃

## ◇昭和30年代の子供の遊び《子供は遊びの天才》

【男子】 水雷こっば・缶蹴り・どこ行き・馬跳び(馬乗り)・ベーゴマS字合戦(陣地取りゲーム)・めんこ・ビー玉 等々

【女子】 ゴム段・ままごと・かごめかごめ・とおりゃんせ・お手玉石蹴り・あや取り・あの子が欲しい・チョンパ 等々

男子は上記の遊びもさることながら『探検』と称してグループを組んで色々な所へ行きました。当時は一帯にそれらしい場所が沢山あり目的地に困る事はありません。ジャングルと呼んでいた鬱蒼とした雑木林が、錦華公園の裏側に第一・第二・第三と3ヶ所もあり、子供心にもぞくぞくと興奮したものです。今の北の丸公園は警察学校の広大なグラウンドで、その奥には見渡す限りの草地が広がっていました。

何と言っても近くの探検の場所としては、明治大学の旧校舎が一番でした。記念館のドームを境にして北側（お茶の水駅寄り）の屋上は立ち入り禁止の場所となっていました。子供達の探検心は強く、守衛さんの監視を盗んではドームの非常に危険な端を、スリル満点で通り抜けて忍び込んだものです。また、明治大学の小川町校舎は当時焼け野原（病院の看護婦宿舎が罹災）で非常階段の鉄骨だけが焼け残っていて、その上部まで階段を揺らしながら昇ったことも思い出します。その空き地の隣にあったのが佐野神経科病院（当時、左翼運動で著名な佐野学氏の令兄が院長）で、子供には怖くて中までは流石に探検できませんでしたが、今でもその建物の一種独特な雰囲気は覚えています。



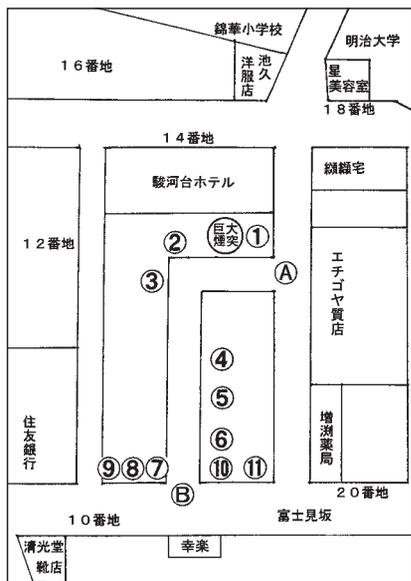
バックに明治大学の旧校舎 昭和32年

## ◇マーケット《戦前は松竹の映画館》

戦後しばらくの間「マーケット」と呼ばれる地域がありました。その路地を入って行くと曲型になっていて、ちょっと違う町に飛び込んだような印象がしました。

マーケットは今の14番地一帯で、もっと昔は松竹の映画館があったと聞いています。その隣には銭湯もあったのではないかと子供たちは思っていました（後になって町内の古老に尋ねたところ、駿河台ホテルの前身の駿河湯とのこと）。巨大な煙突とカマドの跡①があったからです。カマドでは2B弾を爆発させたり、かくれんぼ等をして遊びました。ある人はそこに『金の砂』があったと言いますが定かではありません。

マーケットの入り口には紙芝居屋さんが来て、太鼓を叩かせてもらったり、黄金バットを見たり、もちろん駄菓子を買ったり、子供たちには楽しい思い出です。



マーケットを現在の奥村ビル辺り①から入って行くと、右手奥に本の取次店②がありました。正面左上方が巨大煙突 昭和28年突き当りには日本交通公社③（現JTB）がありました（後に16番地の五徳薬品ビルの隣に移転）。交通公社を左に曲がると左手に学校教材などを扱う木瀬さんのお店④、その先にAパン⑤（現在錦町）があって良い匂いがしていました。更に奥には焼鳥屋さん⑥があり、お客さんから犬が焼き鳥をもらっているのを見かけました。その頃どこの犬も外出自由でしたので、野犬捕獲員（俗称犬殺し）に連れて行かれ、飼い主があわてて保健所に引き取りに行く事もありました。



左上方が巨大煙突 昭和28年

富士見坂側⑧から見ると、左角は靴屋さん⑦、その隣が川村書店⑧、さらに隣が進駐軍放出のチョコレートやガムを売る店⑨。右角は通称『豆やのピー公』⑩と下駄屋さん⑪があり、両店とも子供たちをお店の中に入れて遊んでくれ、特に戦前は学校の先生だった下駄屋のおじさんは何でも知っていて、時計の針の正しい合わせ方も教えてくれたことを覚えています。

この頃は物質的には満たされない時代でしたが、心と時間に“ゆとり”があったかもしれません。

## ◇路地《遊びにはもってこいの場所》

10番地は三角の形をしています。今の新駿河台ビルが出来る前に丁度その三角形の三辺のほぼ中央を入口にして10番地のエリアの中心で結ばれるYの字型の路地がありました。

それぞれの入り口は：

- ①現在の新駿河台ビルの駐車場の出入口の辺り
- ②西村ビルと川村書店の間 ③松島清光堂の辺り

但し、③の路地は完全に守屋さんの敷地のお庭なのですが、当時の子供たちはそんな事など全く気にせずに通り抜けていました。

Yの字の中心で缶蹴りを始めたとなると、一斉に①～③の路地を三方に逃げ出し、鬼は全員を見つけるのに苦労しました。また14番地のマーケットで鬼ごっこをやった時など、全員①の路地に逃げ込み、鬼はその後を追いかけて行っても路地の中心で皆が②③のどちらの路地に逃げて行ったのかが分からず、本当に鬼にとっては泣きたくなる程でした。



昭和31年

## ◇野球チーム《甲子園・神宮球場も夢ではなかった?》

昭和30年代に町内に二つの野球チームがありました。シニアチームは大学生・社会人が中心、ジュニアチームは中学生・高校生でした。それぞれのメンバー数は9人などといったギリギリの編成ではなく、



シニアチームがジュニアチーム時代の写真 昭和22年

かなりの人数で構成していました。年に何回か、主に今の北の丸公園にあった警察学校のグラウンドで試合をしました。たまに四谷とか神宮絵画館前のグラウンド（今ほど整備されてなく凸凹の多いグラウンドだったと記憶しています）でもやりました。

試合は、やはりシニアチームの方が当然強く、ある程度のハンデをつけて貰った様に覚えています。戦後の遊びの少なかった時代、当時のプロ野球の川上・青田への憧れが強かったのでしょうか、路地でも空き地でも男の子が集まればキャッチボールをしたものです。

シニアチームの実力はかなりのもので対外試合でも相当のレベルにありました。当時の監督は第四代町会長をなさった小関啓一さんがやっておられ、助っ人として神保町の高林恒夫さん（立教大学・熊谷組・読売ジャイアンツ等で活躍）を呼んでいました。

## ◇町にテレビジョンが来た《三種の神器がステータス》

日本でテレビの本放送が始まったのは、NHK テレビで昭和28年2月のことでした。続いて同年8月に日本テレビが民放として初めて開局。30年4月にラジオ東京テレビジョン（現TBS）、34年1月にはNHK教育テレビ、2月に日本教育テレビ（NETテレビ・現テレビ朝日）、3月にフジテレビ、39年4月には東京12チャンネル（現テレビ東京）が開局します。

テレビの初放送に合わせて日本で製造された受像機の第一号は早川電機（現シャープ）の白黒テレビで、当時大学卒の初任給が5,000円の時代に、1台なんと175,000円もしたのです。もちろん普通の家庭では高嶺の花で、当時では街頭テレビが各所に置かれていたので、わざわざ遠くまでそれを見に行きました。そのうち三省堂書店にテレビが設置されたので子供たちは放課後、我先に駆けつけました。ただ当時の放送時間はほんの僅かで、受像機の前面が観音開きの扉で閉まっているにもかかわらず、ただただジッと待っていました。また扉が開いても未だテストパターンしか映っていないのに、食い入るようにして画面から目を離しませんでした。



ベビーチーム(?)も活躍



昭和29年

しばらく経って当町内にもテレビが入りました。10番地の斎藤無線と14番地の駿河台ホテルが早かったと記憶しています。特に駿河台ホテルでは、ロビーにテレビジョンが置いてあったので、勝手に靴を脱いで上がり込み、良く見える場所を取るのに必死でした。ただそこにも長幼の序が働いて町会のお年寄りには良い席を譲ってあげました。

力道山のプロレス中継が始まったのもその頃です。力道山・木村政彦 対 シャープ兄弟との世界タッグマッチ選手権試合では、外人レスラーを空手チョップで倒す力道山に大変な人気が集まりました。



## ◇明治大学旧校舎《道場・練習場・体育館は遊園地の楽しさ》

明治大学の旧校舎は最高の遊び場でした。小学校の委員会で「明治大学の中で遊ぶのはやめましょう」と意見が出たくらいです（誰も守りませんでした）。

入り組んだ校舎内で、かくれんぼ・水雷こっば・刑事さんごっこ等にはもってこいの場所でした。屋上で“ごろベース”もやりました。

大学の地下には体育会の道場・練習場があり、柔道・剣道・ボクシング・相撲・水泳・レスリングと、子供にとっては遊園地のような楽しさです。

柔道の道場では、大きな選手が乱取りをしているのを見ただけで30分はすぐ過ぎてしまいます。剣道部のお兄さんの中に子供好きな人がいて、臭い面をかぶせられたり、りんごを手で割って驚かされ、それを分けてくれて一緒に食べたりしました。ボクシング部ではパンチングボールを打たせてもらった事もあります。また世界フェザー級タイトルマッチで白井義男と戦ったパスカルペレスが山の上ホテルに泊まっていて、明治大学



思い出がつまっています

に練習に来たのを見に行き、サインを貰ったのも嬉しい思い出です。

相撲部の思い出は、まわしが校舎の壁面に長々と干してあった事です。プールは一時期、夏休みには一般に開放していたこともありましたが、まるっきり太陽が当たらない地下なので、寒かった事だけが記憶に残っています。

レスリング部も、立派な髭をたくわえたコーチの指導のもと、毎日のように練習していました。この頃の明治大学は中央大学と並んでオリンピック選手を数多く送り出していました。

最上階の体育館ではフェンシング部が練習をしていて、その様子が当時人気のあった映画“ロビンフッドの冒険”とダブリ「俺は大きくなったらフェンシングをやるんだ」と強く決意した子供もいました。

体育館ではバドミントン部も練習をしていて、それが終わった後にコートに入るとバドミントンの羽根が一つ落ちていて、コッソリ内緒で持ち帰って宝物にした人もいました。

## ◇明大優勝パレード《いつの間にか子供達も“オ～オ～明治♪”を合唱》



町会長を筆頭に役員が神宮球場で応援 昭和32年

戦後しばらくの間、六大学野球リーグはまだまだスポーツの花形でした。慶応・早稲田の二強時代が続いていましたが、昭和27年に岡山東商業高校から秋山登、土井淳が明治大学に入学するや、二年生の秋、三年生の春、四年生の春と3回もリーグ優勝を果たし、その都度神宮球場から駿河台の明治大学本校まで優勝パレードが行われました。町会では商店会と共同で、その優勝を祝う為に祝賀ポスターを各店頭に掲げ出し、富士見坂には万国旗を張り巡らしました。

子供たちは祝賀パレードの到着を今か今かと待ち望み、明大の屋上から九段坂方向を見渡すと夕闇の中に提灯の火が延々と続く様子を望むことができ、非常に印象的な風景でした。

パレードが町内を通過する時には明大生の応援歌の合唱も最高潮に達し、興奮のあまりに商店のウインドーが割られてしまう程でした。いつの間にか子供達も一緒になって“オ～オ～明治♪”を歌っていました。

昭和31年に秋山・土井だけではなく、岩岡・黒木・沖山と何と5人がプロ野球の大洋ホエールズに入団しました。同じ大学から同一プロ野球球団に5人も入団したのは、長いプロ



昭和28年11月

野球の歴史の中でも唯一のもので。その後、明治大学は何回も六大学野球リーグで優勝を飾っておりますが、この時期ほど盛り上がった事は他にありません。

この頃は町と明治の学生の関係は密でした。まさしく学生の町で、多くのお店が学生相手の商いをされていて、現在の町と学生との関係とは大違いです。



## ◇火の見やぐら《町会のランドマーク？》

町内に消防署があるのは、皆さんよくご存知のことと思います。正確には神田消防署駿河台出張所といいます。その建物に今でも火の見やぐらが残っています。周囲の建物にすっかり隠れてしまって、うっかりすると見落としてしまいがちですね。この建物は、大正13年に建てられ、昭和3年に改築、今年で築78年は都内最古です。

昔はその名の通り『火の見やぐら』としての機能を果たしていました。三階建てのビルなどが少なかった当時は皇居まで望見できました。消防署員が交代で最上部のぐるりとした回廊を、それはそれはゆっくりと歩



昭和11年頃

いて廻り、火事の早期発見に努めていました。それこそ焚き火だろうが

秋刀魚を焼いている煙だろうが「怪煙発見！」と言っては下で待機している隊員に直ちに伝え、消防車が出動して行きました。その当時は人員の関係か、残っている署員が少なく車庫に脱ぎ捨てたままになっている衣服や靴などを近くの町会員が片付けたりしたそうです。

今では本来の用途としては当然使い物にならず、火事の現場から戻って来た消防車のホースの物干し場と化しているようです。



現在

## ◇都電の思い出 《⑫番は 両国⇄新宿 ⑩番は 須田町⇄渋谷》

10番地の新駿河台ビルの前に、都電の停留所があったことを覚えていますか。系統別に分かれていて⑩は渋谷行き、⑫は新宿行き、⑮は早稲田行きだったと思います。但しこれらの方面に行くには、駿河台下の交差点の反対側の停留所（旧「田金」果物店の前）から乗車しなければなりませんでしたが。

運賃は（もちろん時代によって変動しましたが）同一系統なら、どこまで乗っても10円でした（戦前は7銭だったとか）。早朝割引等もあって、その場合は7円だったか8円だったか。

チンチン電車とはよく言ったもので、車掌さんが白い紐を引っ張ると乗客の乗り降りが終了したことを運転手に伝え、



戦前は明大通りに市電が走っていました。  
富士見坂上 昭和19年

その合図で発車しました。車掌さんの首

から下げた独特の鞆と、切符を切る鋏に子供たちは一種の憧れを持ったものです。

悪い子供たちは線路に5寸釘を並べ、その側に耳を当てて電車が来るのを今か今かと待ちうけ、ドキドキしながら電車に轆かせていました。その薄べったくなった釘が剣状になり、それを空き地などの土のある場所で陣地取りなどをして遊びました。偶然にもその当時の悪がきグループが、今回この50周年記念誌を編集しました。



いつの間にか都電は交通渋滞の元凶などと言われ出し、順々に路線が廃止されバスに取って代わる事になるのですが、いつになっても都電の思い出は心の中に郷愁として残っています。

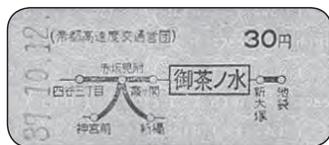
## ◇丸の内線開通 《真っ赤なボディは衝撃的》

普段はなかなか気が付きませんが、私たちの町ほど交通の便に恵まれている所は他に例を見ないのではないのでしょうか。確かに昔は国電（現JR、もっと前は省線）の御茶ノ水駅だけでしたが、その代わりに都電が縦横に走っていました。都電が順次廃止になっていく間に、地下鉄・丸の内線が昭和29年に開業（池袋～御茶ノ水間）しました。それまで銀座線のオレンジ色の車体を見慣れていたので、丸の内線の真っ赤なボディはとても衝撃的でした。



39年には東西線（高田馬場～九段下間、41年に竹橋まで延長）44年には千代田線・新御茶ノ水、47年に三田線・神保町、54年にも新宿線・神保町、平成元年には半蔵門線・神保町が開業しました。鉄道だけで7駅も利用出来るのです。郊外に住んでいる人には、多くの地区で鉄道の駅まで徒歩で行かれるのは稀で、殆どバスなどを利用しているのを考えると、何と私たちの町は恵まれていることでしょうか。

地下鉄丸の内線の開業の日は、戦後初めての地下鉄ということで提灯行列を以ってその開業を祝いました。町会にも祝賀記念切符が配られ、まだ小学生だった子供も友人と一緒に池袋まで乗車しました。当時は池袋・新宿という子供にはとても怖い印象があり、池袋まで（所要11分は今と変わらないのに驚きます）行って地上に出ても、どこに行くという当てが無く、直ぐにUターンして帰って来てしまったと言う微笑ましいエピソードも聞いています。



【一口メモ】千代田区内に最初に電車が走ったのは明治23年11月1日、秋葉原貨物駅開業の日。明治38年8月21日、飯田町～中野間に日本最初の電車開通、その年末にはお茶の水まで走るようになった。

## ◇洋服屋さん《今では2軒のみ》

かつて町内には何と11軒もの洋服屋さんがありました。思い出すままに挙げてみると、まず20番地の現在の第二龍名館ビル北の角の場所にサイトテーラー、その隣にミクニテーラー、南の角にフジエダ洋服店、角を曲がって岩崎洋服店・平田洋服店。10番地に行って山嘉商店、中根洋服店、神田テーラー、テーラートミー、スドー洋服店。16番地にはテーラー池久。洋服関連ではボタン・帽子の平井帽子店、藤本帽子店。

何故、このように集中して洋服屋さんが多かったかを町会の長老に



昭和22年頃

伺ったところ、当時近辺には明治大学、中央大学、日本大学等の大学があり、在学中は制服で過ごしていた学生も卒業するにあたり背広を新調し、また社会人になっても馴染みの神田で洋服を誂えたからではないかとのことでした。



神田と言えば、現在は古本屋街、スポーツ店街、楽器店街と特徴ある町並みを形成していますが、かつてこの様に狭い地区で洋服店街を形作っていたことは、非常に興味深いものがあります。

## ◇忍塾《岡本のおじさん・おばさん ありがとう》

町会創立の頃、12番地に岡本さんという『おじさん』『おばさん』ご夫婦がいて、二人で塾（当初はその言葉を嫌っていて、子供たちに塾と呼ばせず『おじさんち』と言わせていた）を開いていました。塾と言っても現在の受験の為の学習塾とは大違いで、子供たちはお店屋さんの子弟が多かったので学校の放課後に、勉強はもちろんそれ以外のことも色々と教えてくれる、言わば江戸時代の寺子屋みたいな雰囲気の間でした。



昭和28年

生徒は小学生から中学生までで、町内の大部分の子供たちが通っていました。自分達を先生と呼ばせな



昭和31年

いため、『おじさん・おばさん』（低学年は『おじちゃん・おばちゃん』）と呼んでいました。

休日にはハイキングに連れて行ってくれたり、夏休みには泊りがけで沼津の海に連れて行ってくれたりもしました。おじさんちの五右衛門風呂にも入れてくれて、その浮き蓋に乗ってはしゃぎ回ったことも楽しい思い出です。

今の学習塾からはまるで考えられない塾で、生徒と言うよりも、むしろおじさん・おばさんの本当の息子や娘みたいなもので、上級生はお兄さん・お姉さん、下級生は弟・妹といった大家族の様な塾でした。

## 永井龍男について

主に昭和期において、数多くの作品を発表した作家・永井龍男が当町内で生まれ、少青年時代も当地で過ごしたことをご存知でしょうか。彼の随筆集『東京の横丁』（平成3年講談社刊。昭和59年の日経「私の履歴書」に連載したものを加筆。以下の引用はすべて同書）に拠れば「私は明治37年5月、旧東京市神田区猿楽町1丁目2番地で生まれた」となっており「駿河台をお茶の水橋方面から下ると駿河台下の市電の十文字に達するが、その手前明治大学、旅館龍名館支店などに添って右に下るもう一つの小坂があり、私の生まれた家は、その途中を右に入った横丁の奥の借家であった。」との文章から判断すると、今では神田小川町3丁目18番地、現在の星ビル辺りになります。



永井龍男は明治44年に錦華小学校に入学します。「錦華小学校は東京市でも最も創立の古い小学校の一つとされていただけに、私が就学すると間もなく、老朽した校舎が建て直されることになった。」「校舎新築のため二部授業を実施中で、新入学生徒は小川尋常小学校を間借りして……」となっており、当町会に縁の深い二つの小学校に永井が通学したというのも興味深い。

錦華小学校といえば夏目漱石が幼年期に通学したことでも知られますが、永井のいた家（その後、同じ横丁の二階建ての家に移転）の二階の間借り人の所に、かの芥川龍之介がよく遊びに来ていて永井とも顔なじみであったといえます。また小学校の同級生には波多野完治（心理学者）がいました。



近代の文豪たちや作家・学者が、このような狭い範囲で交流があったというのも、神田小川町近辺は当時から文化を発信する礎が出来ていた事の証明になるでしょう。

### 【永井龍男略歴】

明治37年5月20日東京市神田区生まれ

大正9年文藝雑誌「サンエス」に『活版屋の話』が入選

同12年「文藝春秋」に『黒い御飯』が掲載

昭和2年文藝春秋社に入社。「オール読物」「文藝春秋」編集長を歴任

同25年『朝霧』で横光利一賞。40年短編集『一個その他』で野間文藝賞、芸術院賞

同44年『わが切抜帖より』で読売文学賞、47年菊池寛賞。

同48年『コチャバンバ行き』で読売文学賞。50年短編『秋』で川端康成文学賞

昭和43年芸術院会員 48年文化功労者 56年文化勲章受賞

同60年鎌倉文学館初代館長

平成2年10月12日逝去

# お祭り 今昔

戦後しばらく子供達にとって、これと言った楽しみが無かった時代に、神田祭は非常に待ち遠しいものでした。本祭りは一年おきなので『今年は蔭なんだ』と言ってガッカリしたのを憶えています。

本祭りの年には四月頃から町会の役員さんが寄付を集めて回り、町会の頭かしらが神酒所を設営し、二年振りの本番に備えて神輿や山車の金属部分を三日位かけてピカールで磨き上げていました。大人たちは朝から神酒所に詰めて話し込んだり酒を飲んだり、のどかな時代でした。

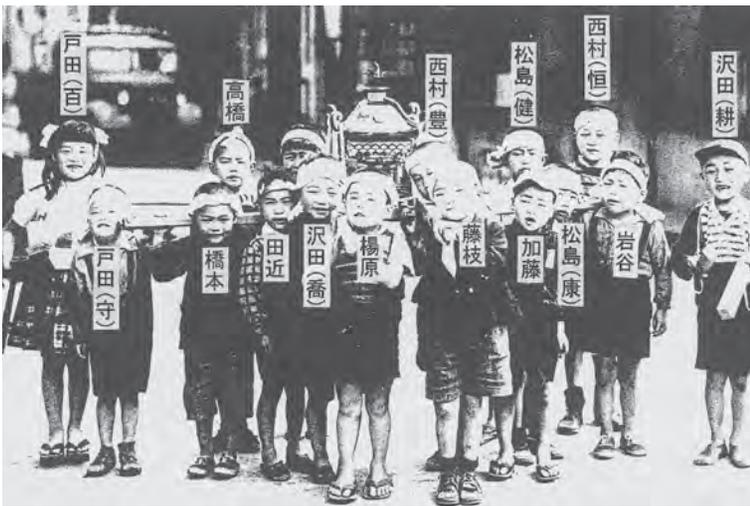
当初、町会には幼児から小学校低学年用の小さな可愛いお神輿と中神輿しかありませんでしたが、その代わりに立派な太鼓の山車がありました。子供の数も多かったので、引き綱にあふれるくらい集まり、それに付き添う親も加えると大変な人数で、非常に活気に満ちていました。幼い子供達は男の子でも化粧をしてもらい鼻筋にお白粉を塗り花笠をかぶり小若の半纏を着て参加しました。太鼓も取り合いです。打ち方は《ド〜ンド〜ンカッカッカ、ドンドンドンカッカ》でした。

当時の子供達も大きくなってくると、中神輿では当然満足しません。そこで有志が集まり趣意書を作って町会の役員さんに相談し、了解をいただいて毎月の定額積み立てを二年間続け、昭和61年に二尺五寸の大神輿を調製しました。最近、お祭りの神輿の担ぎ手が少なくて苦慮している所もあるように聞きますが、当町会に関しては毎回大勢の人が集まり、非常に楽しいお祭りが開催されています。

独立したり、結婚して親元から離れていった人たち、嫁いだ娘たち、それぞれが友人や妻や夫、子供を連れてお祭りに帰って来ます。町のあちこちでは幼な友達同士〇〇ちゃんと呼び合う声が聞こえます。そして町内で働く人たちも多数参加して、親睦の輪は益々大きくなっていきます。



昭和24年5月15日

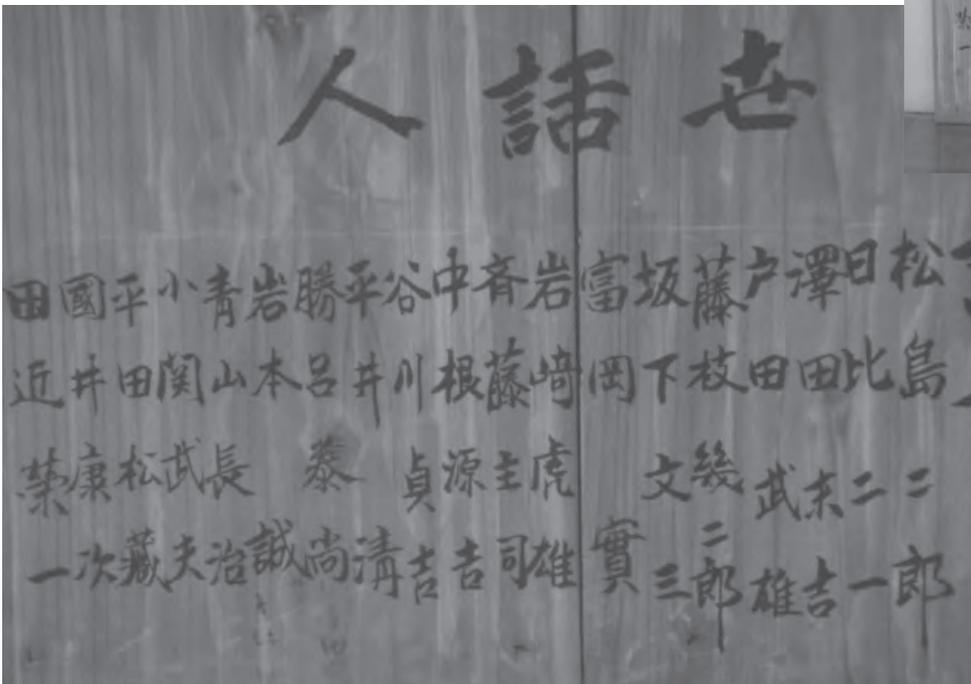
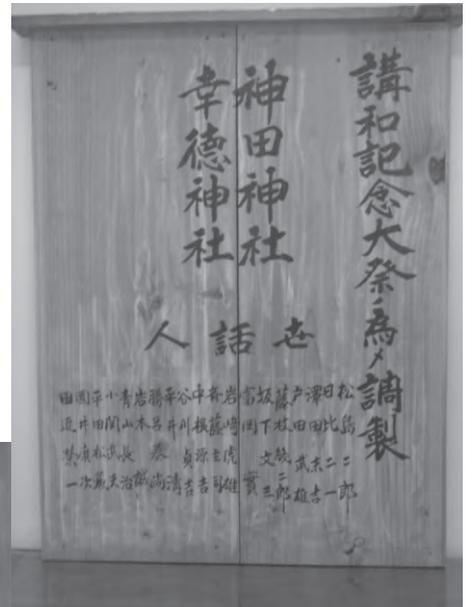


昭和25年

# 祭礼 その2



神輿保管箱に見る、昭和二十七年・中神輿調製時の『講和記念大祭』の文字と世話人の氏名



錚錚たる世話人の方々



昭和27年頃



昭和29年頃

# 浴衣の柄の



# 変遷

昭和31年頃



昭和41年頃



昭和56年頃（現在まで）

# 祭礼 その4



正装にて鳳輦のお迎え





昭和56年



# 祭礼 その6



平成15年



# 祭礼 その8



『いよ〜！ 日本ー！』





小川町祭り半纏



平成 17年 宮入

## これからの 町会

本誌の【町会行事】中扉（P11）に次のような記述があります。

『町会発足当時、新年交歓会には正装をした大人、“よそいき”を着た子供が100名前後、小川町公園に集まりました。夏のバスハイクではバス2台で海水浴に行きました。』

新年交歓会には沢山の人が出席しお屠蘇を酌み交わし、終わると皆で神田明神へ初詣に行きました。海水浴は昭和30年代が一番盛況だったと記憶しています。この頃は遊び・楽しみも今の様に多くは無く、町会行事に参加する事は大きな喜びでした。バス2台で補助席も使い、老若男女を乗せ町会を出発しました。

しかしながら、新年交歓会は出席者が少なくなって自然消滅し、夏のレクリエーションも参加者が減り、今では形を変えて夏の食事会として30名位の出席で行っています。

住民減少の原因は、核家族化・住環境の変化、路線価の急騰、商売の環境の変化・後継者問題、貸しビルを建築して転居等々、いくつかの理由が考えられます。その反面、跡地や貸しビルにはテナントとして新しい店舗や事務所が入ってきて、町の姿は刻一刻と変わって来ています。そこに働く人々は自分たちが生活している町での時間に比べて、より多くの時間を職場で過ごしています。

このような現状を考えてみますと、これからの町会は、町を地域社会ととらえる住民と職域社会ととらえる人々との交わりを通して町づくりをしていく事——地域の共有——が益々大切になってきます。そして両者が一体になった時、いつ起こるか分からない大規模地震などの不安への備え、安心して生活・仕事のできる町への前進、子供やお年寄りを守っていく温かい眼の育成が実現すると確信しています。

町会では会員相互の親睦を厚くし、明るい町会として共同の福利を増進することを目的に様々な事業を行っています。とりわけ、地域を挙げての神田祭はその核になるものと思います。これら事業を通して、住む人・働く人共に安らげる町“Peaceful Town（ピースフルタウン）”の創造を目指し、在住者と在勤者の交流を大いに働きかけていきます。

平成18年5月26日

小川町三丁目西町会 役員一同

## 編集後記

私たちの神田小川町三丁目西町会が創立 50 周年を迎えるにあたり記念になるものを町会員の皆様にお配りしようとの意見が役員会の議題になったのは昨年 4 月頃のことでした。さて何にしようかと議論してみましたが、所謂『記念品』の配付だとその場限りで終わってしまい、『記念』の意義が薄れるということで、最終的に『記念誌』を発行しようとの意見が満場一致で採択されました。

町会員の中から 6 名の編集委員が任命され、早速資料の収集、原稿執筆の依頼、写真の選択などの作業に入りました。編集方針として単なる 50 年間の事実の羅列ではなく、皆さんが『読んで楽しい物』の作成を心掛けました。

本日、どうにか発行に漕ぎ着けましたが、なにしろ本の編集に不慣れな者たちですので皆様のご満足を頂ける記念誌に仕上がったかどうか甚だ心配です。懐かしい記事や写真に少しでも興味を覚え喜んで下さったなら、編集委員としては望外の幸せです。

最後になりましたが、今回の記念誌に多くの記事をお寄せ下さった町会の皆様、貴重な写真を掲載するにあたりご快諾頂いた神保町の木内武郷氏には誌上をお借りして改めて御礼を申し上げます。

平成18年5月26日

小川町三丁目西町会『創立50周年記念誌』編集委員  
沢田喬史・田近恭一・加藤久雄  
澤山和孝・小関浩司・谷川宏一



# 町 会 役 員 名 簿

\*印は兼任

町 会 長	岩崎 與士			
副 町 会 長	松島 健	斎藤鉄太郎	田近 恭一	
会 計	*斎藤鉄太郎	小関 浩司		
会 計 監 査	金岡 伸治	勝呂 光男		
総 務 部 長	*田近 恭一			
同 副部長	*澤山 和孝			
環 境 衛 生 部 長	沢田 喬史			
同 副部長	鈴木 善一	戸田 守彦		
福 祉 部 長	加藤 久雄			
同 副部長	村上 龍雄	下村 静史		
文 化 部 長	*松島 健			
同 副部長	北 良雄(ミヅ)	江本 篤哉	碁目 駿英	
青 年 部 長	谷川 宏一			
同 副部長	後藤 正利	新井 康弘	日比 徹	増渕 英寿
防 犯 部 長	澤山 和孝			
同 副部長	山本 貢	木邑弥太郎		
防 火 部 長	日比 廣美			
同 副部長	斎藤 高	長島 昭利		
交 通 部 長	杉野 榮一			
同 副部長	澤山 秀幸	下川 剛	松島 寛直	加藤 久志
婦 人 部 長	増渕 美代			
同 副部長	小関 幸子	増渕 節子		
同 幹 事	松島知江子	岩崎 順	杉野まち子	日比悦子
	長島 利子	下村 洋子	田近 裕子	
ブ ロ ッ ク 委 員				
A (8番地)	勝呂 泰尚	B (10番地A)	斎藤 高	
C (10番地B)	山本 貢	D (12・14番地)	浅見 勝弘	
E (16・18番地)	鈴木 善一	F (20番地)	小関 浩司	
G (22番地)	佐野栄一郎			
顧 問	戸田 武雄	神戸 祐三		
相 談 役	村上 悦造	富岡 淳		

## ■小川町三丁目西町会会則

### 第 1 章 総 則

(会名、事務所)

第 1 条 本会は小川町三丁目西町会と称します（以下本会といいます）。  
事務所は会長宅におきます。

第 2 条 本会は千代田区神田小川町三丁目 8、10、12、14、16、18、20、22 番地区域内に在住する者及び事業所、事務所、営業所、その他これに類する人によって組織されます。

(目 的)

第 3 条 本会は、会員相互の親睦を厚くし明るい町会として共同の福利を増進することを目的とします。

(事 業)

第 4 条 前条の目的を達成するため次の事業を行います。

- ① 会員慶弔、慰問、表彰、厚生及び福祉に関すること。
- ② 保健、衛生、体育、保安自警に関すること。
- ③ 地域内の清掃美化、街頭照明に関すること。
- ④ 祭典、及び文化的事業に関すること。
- ⑤ その他本会共同の福利増進に関すること。

(会 費)

第 5 条 会員は、会費を負担します。会費は毎月一口額 100 円とし、会員の負担とする口数（5 口以上）は任意とします。

### 第 2 章 役 員

(役員及び定員)

第 6 条 本会に以下の役員を置き、役員会を構成します。

- ① 会 長 1 名
- ② 副 会 長 若 干 名
- ③ 会 計 2 名
- ④ 会計監査 2 名
- ⑤ 部 長 各部 1 名

(運営委員及び定員)

第 7 条 本会に以下の運営委員を置き、運営委員会を構成します。

- ① 副 部 長 各部若干名
- ② ブロック委員 若 干 名

(選 任)

第 8 条 1. 会長、副会長、会計及び会計監査は総会に諮って選任します。  
2. 部長及び運営委員は会長が役員に諮って委嘱します。

(職 務)

第 9 条 1. 会長は本会を代表し、会務を総括します。  
2. 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはこれを代理します。  
3. 会計は財務を担当し、処理します。  
4. 役員及び運営委員は会長の意を受けて会務を処理します。  
5. 会計監査は会計を監査し、その結果を役員会及び総会に報告します。

(任 期)

第 10 条 1. 役員の任期は 2 年とします。但し重任を妨げません。  
2. 補欠による役員の任期は前任者の残存期間とします。  
3. 役員は任期終了後も後任者の定まるまではその職務を行います。

(顧問・相談役)

第 11 条 顧問・相談役は役員会が必要と認めたときこれを推薦し、会長が委嘱します。

### 第 3 章 会 議

(総 会)

第12条 総会は定期総会と臨時総会とします。

定期総会は毎年年度末より2ヶ月以内に開き、臨時総会は会長が認めるとき及び会員の2分の1以上からの要求のあったときに開きます。

(総会附議事項)

第13条 総会の附議事項は次の通りです。

- ① 会則の変更
- ② 収支決算及び事業報告の承認
- ③ 収支予算及び事業計画の決定
- ④ 第8条の1. に定める役員の選任

(役員会・運営委員会)

第14条 会務運営のため必要に応じ役員会・運営委員会を開きます。

(招 集)

第15条 役員会・運営委員会は会長が招集します。

(採 決)

第16条 議事は出席者の過半数の同意を以て決します。

### 第 4 章 機 構

(部 ・ 団)

第17条 第4条に定める事業を執行するため次の部及び団をおきます。

- ① 総 務 部 会議、慶弔、慰問、表彰、福利増進、渉外及びその他
- ② 文 化 部 親睦及び文化事業
- ③ 環境衛生部 保健衛生及び環境保全
- ④ 福 祉 部 福祉全般
- ⑤ 防 犯 部 防犯安全対策
- ⑥ 防 火 部 防火安全対策
- ⑦ 交 通 部 交通安全対策
- ⑧ 青 年 部 青少年の健全育成及び各事業補助
- ⑨ 婦 人 部 親睦及び各事業補助
- ⑩ 防 災 団 その運営については、別に規約を定めます。

### 第 5 章 会 計

(財 源)

第18条 本会の経費は会費、寄附金その他の収入で充当します。

(会 計 年 度)

第19条 会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わります。

(予 算)

第20条 会長は毎年収支予算を編成し総会の決定に附します。

(決 定)

第21条 会計は毎会計年度終了後、直ちに決算書を作成し会計監査を経て総会の承認を得なければなりません。

### 附 則

この会則は、平成14年5月24日より施行します。

## ■慶弔規約

1. 会員及び役員とその家族の慶弔は、下記の事項及びその内容（金額等）を役員会に諮り実施します。
  - ① 成 人
  - ② 死 亡
2. 本会に功労のあったものについても、1.に準じるものとします。

## ■小川町三丁目西町会防災団名簿

団 長	岩崎與士		
副 団 長	斎藤鉄太郎・松島 健・田近恭一		
会 計	斎藤鉄太郎・小関浩司		
幹 事	沢田喬史・加藤久雄・杉野榮一・日比廣美・澤山和孝・谷川宏一・増渕美代		

第1班（8・22番地）	班長 神戸祐三	副班長 勝呂泰尚・(株)ミズノ
第2班（10番地A）	班長 加藤久雄	副班長 澤山和孝
第3班（10番地B）	班長 松島 健	副班長 下川 剛
第4班（12・14・16番地）	班長 浅見勝弘	副班長 鈴木善一
第5班（18・20番地）	班長 田近恭一	副班長 沢田喬史・辻 誠一

情報連絡係	日比廣美・斎藤 高・小関浩司
災害対策係	杉野榮一・山本 貢・(株)ミズノ
救 護 係	増渕英寿・婦人部

## ■小川町三丁目西町会防災団規約

### 第1条（名称及び本部）

本団は小川町三丁目西町会防災団と称し、本部は平常時には団長宅に設置し非常時については状況により移動する。

### 第2条（組織）

本団は小川町三丁目西町会会員（以下団員という）をもって組織する。

### 第3条（目的及び事業）

本団は千代田区役所及び各関係機関と連携をとり、団員の防災意識の高揚を図ると共に自主的防災活動を行い震災その他あらゆる災害時に初期消火、避難誘導、救護、治安の維持、物資の調達等の活動に当たり団員の安全確保を図ることを目的としてその為の事業を行う。

### 第4条（役員）

本団に次の役員を置く。

- ①団長1名 ②副団長3名 ③会計2名 ④幹事若干名
- 団長は小川町三丁目西町会会長が兼任し、その他役員は団長が任命する。
- 役員任期は町会会則に準ずる。

### 第5条（役員職務）

- 団長は本団を代表し団務を総理する。
- 副団長は団長を補佐し団長が事故あるときはこれを代理する。
- 会計は経理にあたる。
- 幹事は団長の命により団務を処理する。

第6条（会議）

本団には役員会、班長会を置く。

第7条（役員会）

団務運営のため必要に応じて開催する。

第8条（編成）

1. 本団は第2条に基づき地区別に班を編成する。

- ①第1班 8・22番地
- ②第2班 10番地A
- ③第3班 10番地B
- ④第4班 12・14・16番地
- ⑤第5班 18・20番地
- ⑥各班には班長1名と副班長若干名を置く。

2. 本団は第3条に基づき次の係を置く。

- ① 情報連絡係 町内の情報収集、広報活動を担当し防災意識の高揚に務め、災害時には正確な情報を流し、民心の安定等必要な任務を行う。
- ② 災害対策係 町内の防災に必要な資材の調達と整備を行い、必要に応じ防災訓練等を行う。災害時には関係機関と連携し初期消火に務め、避難誘導、防犯等の任務を行う。
- ③ 救護係 常に必要な資材の調達、整備を行うと共に救急袋の点検、補充を行う。災害時には負傷者の応急処置、非常食糧の調達・配給等の任務を行う。

第9条（団員の義務）

団員は本団の目的及び事業を達成するため、各種事業に積極的に参加し協力しなければならない。

第10条（費用）

- 1. 本団の費用は原則として町会の予算及び区の補助金より支出し特別会計として処理する。
- 2. 特に必要と認めたときは役員会の決議により分担金を徴収することが出来る。

第11条（委任）

この規約に定めぬ条項で本団の運営に必要な事項は団長が役員会に付議してこれを定める。

第12条（施行月日）

この規約は平成8年11月1日から施行する。

小川町三丁目西町会『創立50周年記念誌』

平成18年5月26日 発行

発行者 小川町三丁目西町会会長  
岩崎 與士  
千代田区神田小川町3-12

編集者 記念誌編集委員